

第6回エコプレミアムクラブシンポジウム

グリーン・ニューディール
“地の塩効果を求めて”

2009年8月3日

慶應義塾大学経済学部

細田衛士

ニューディール政策を振り返る

- あの時何が起きたか…。
- NY株価の暴落、それに続く大不況。
- 大量の失業者（失業率10%以上が10年近く続く）。
- いわゆる「有効需要」不足が起きた。つまり、お金の裏付けられた需要がない！
- そこに出てきたのがケインズとFDR (Franklin Delano Roosevelt)。

ケインズの慧眼

- 資本主義が成熟化すると有効需要が少なくなる。
- 潜在供給能力は有効需要を上回り、供給過剰になる。こうして、恐慌が起きて経済は慢性的不況に悩まされる。
- 有効需要を補うために政府の積極的な財政政策・金融政策が必要だとケインズは主張。
- この考え方に飛びついたのでFDR。

ローズベルトの政策

- FDRはかなり忠実にケインズ政策を行った。
- また、当時旧ソビエトの計画経済に対する憧憬がアメリカにあった。
- 進歩的知識人は大挙して旧ソ連を訪問した。
- 保守的アメリカ人は、FDRの政策を自由主義に対する脅威と受け取った。

FDRの政策の効果

- 有効需要政策を理論化したのはケインズ、それを実行したのはFDRとされている。
- 確かにそうかもしれない。
- しかし、FDRの有効需要政策は必ずしも成功しなかった。失業率も10年以上にわたって15~20%であった。
- 景気を回復させ失業率を減らしたのは、結局戦争であった。

どういうことか？

- ケインズの見立ては正しかったが、ケインズの処方箋は必ずしも正しくなかった。
- 積極的財政政策は功を奏さなかった。
- そう簡単に有効需要を喚起できるものではない。
- しかも、やり方を間違えるとインフレーションになってしまう。
- こうして ‘70～ ‘90年にかけてケインズ経済学は捨てられることになった。

その結果どうなったか

- 愚かな市場万能主義がはびこってしまった。
- ケインズ経済学が不評ななか、あたかも市場はパーフェクトであるかのように経済学者も思い始めてしまった。
- ニュー・エコノミーなる言葉ができ、新しい経済は景気変動とは無縁と言いだすものまで出てきた。

さてここで言いたいこと

- 「グリーン・ニューディール」なる言葉に浮かれているのではない。
- FDRの有効需要政策に効き目がないのに、本当にグリーン・ニューディールで経済が支えられるのか？
- そんなわけがない。有効需要政策になり得るわけがない。
- それでは意味がないのか。それも違う。

「地の塩」 効果

- 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。」（マタイ 5：13）
- 塩がなければ動物は生きられない。動物にとって重要な役割を果たすもの。味付けの基本でもある。

エコは地の塩のようなもの

- エコですぐ儲かるほど経済は甘くない。
- エコで参入して黒字化するまで企業はどれほど苦勞することか。
- 一方、エコで急激に有効需要を盛り上げることはほとんど無理。
- しかし、である。エコで長期的に経済を「方向付ける」ことは可能。
- つまり、今よりもっと経済と環境の両立を促す大きなチャンス。

経済構造の改革の必要性

- 国レベルでも地方レベルでも、企業レベルでも市民レベルでも、Economy-Ecology (or Environment) 、Eco-Eco またはEco-Envの道をもっと探らなければならない。
- 資源は、原油もベースメタル（鉄や銅など）もそして希少金属も近い将来ピークアウトする。
- 環境容量もいっぱいいっぱい！

だとしたら…

- 早めに経済の発展経路を変更すべき。
- 徹底的なエネルギー節約技術、資源節約技術の開発、およびそれらの技術を経済に埋め込むためのシステム開発が必要。
- その方向づけにグリーン・ニューディールは用いられるべき。
- 従来型の発展経路の方向転換に役立たないなら、グリーン・ニューディールは捨てられるかもしれない。

大切なのは…

- 大切なのは需給のマッチング。あるいは、シーズとニーズを合わせることに。
- シーズだけ作ってもニーズがなければだめ。ニーズがあってもシーズがなければだめ。
- エコを抜きにすれば、価格が需給を一致させるわけだが、エコが入るとそうはいかない。
- だからこそグリーン・ニューディールの発想が必要になる。
- エコポイントも徐々に効いてくるが、その影響の持続化が必要。

プリウスは一日にしてならず

- プリウスを見よ。プリウスの大健闘は誰の目から見ても明らか。
- しかし、そのプリウスも短期的な視点で作られたわけではない。
- トヨタはあらゆる技術を抱き込み、「育てて」いた。
- 合わせ技の真骨頂とも言える。
- しかも、シーズとニーズがマッチ。

プリウスはそこらに落ちていない

- イチローもそうだがプリウスも、そうヒョコヒョコ出て来はしない。
- 大変な努力と挑戦心の結果なのだ。
- そして、あらゆる可能性を「感じ取る」。
- 「家づくりたちの捨てた石が隅の頭石となった。」
- 鉄道技術などはこれからが期待できる。

結論

- グリーン・ニューディールには「地の塩効果」を期待しよう。
- 急激な有効需要増加の効果はあまりない。
- しかし、長期的な経済のかじ取りを環境調和の方向に持って行くことは大いに可能。
- そして、技術のシーズとニーズをマッチングさせることが必要。
- 合わせ技（プリウス型）、温故知新（鉄道型）などを探るべき。